

2022/8/7

ヨハネの黙示録 講解メッセージ②⑩

『ヨハネの黙示録 8章 一祈りの答え一』

神は時間や空間に支配されることのない永遠性の方です。永遠性の神と、有限性のこの世界に接点はありません。だから、私たちは神を見ることができないのです。永遠性とは、変わることがない不動のことです。神は私たちに変わることのない未来を約束しておられます。しかし、この世界のものは、いつかはすべて過去になります。ですから、この世界に未来はありません。神は私たちに未来を所有させたいと願って、この世界に戦いを挑んでいるのです。

未来と過去がぶつかる接点は、「今」です。永遠性というのは、私たちのこの世界においては「その瞬間」、すなわち「今」ということになります。だから、神は「今」という瞬間瞬間に私たち語りかけます。神が語りかける方法は二つあります。一つは、神が与えてくださった魂を通して語りかける方法です。しかしそれは肉の声ではありませんので、ぼんやりとしかわかりません。もう一つの方法は聖書です。聖書は資料ではなく、今あなたに語りかけている神の言葉です。ただし、私たちが神の言葉を聞くのは、本当に困っているときや、自分の限界に気づいたときです。この世界で楽しんでいる時にはなかなか聞こうとしません。

神は、私たちが自分自身に気づき、神の言葉を聞く者になるようにしようと導かれます。聞けばそこに答えがあります。それを信じる時、神の言葉があなたの力となり、あなたに変化をもたらすのです。

このような視点でヨハネの黙示録を読むならば、神は未来に起こる苦しみにについて語っているのではなく、今のあなたの苦しみにについて、その意味を教えておられるのだと受け取ることができます。

私たちは有限の世界に生きていますから、誰もが終わりの時に向かって生きています。神は、その私たちに向かって希望があると語っておられるのです。そのまとめがヨハネの黙示録です。

神は私たち未来を持たせようとし、過去と戦っておられます。その接点が「今」です。普段は神を思い出すことがなくても、苦しいときに神に祈る、それでいいのです。その瞬間瞬間に神と出会うのです。私たちが神と出会うことができるのは、私たちの中に神の光があるからです。光は闇の中で輝きます。苦しいとき、闇の中にあるとき、私たちは光を見ることができるのです。

■ここまでに解かれた封印

ヨハネの黙示録は、7章までに6つの封印が解かれました。

1～5の封印は、様々な苦難について書かれ、誰がこの苦難に耐えることができるのかと問い、第6の封印で、ついに私たちに自由を与える救いが語られました。

この後に解かれる第7の封印は、初めに戻って、もう一度苦しみについて語られます。このようにヨハネの黙示録は、全体を述べた後、また最初に戻って螺旋階段のように様々な視点から救いが語られます。この第6の封印では、1～5で語られた苦しみの具体的な中身が述べられています。

それでは第7の封印が解かれる様子を見ていきましょう。

■神の怒り

「小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といなずまと地震が起こった。」（黙示録8:1-5）

最後の封印が解かれ、天は静粛な雰囲気になりました。そして、すべての聖徒の祈りが神の御前に届いている様子が描かれています。神が判決を述べる前に、すべての祈りは天に届いているのです。「雷鳴と声といなずまと地震」は、祈りに対する神の答えです。それは、「神の怒り」を象徴します。神の怒りは、人に対してではなく、人を苦しめるものに向かいます。

聖書は人間が書いたものではなく、神の概念で書かれています。ですから、自分の物差しではなく、神の物差しを使って理解することが大切です。神の物差しは、イエス様の十字架で明らかにされています。神は、私たちの罪に対して怒りを覚え、取り除こうとなさいます。それは、人に対してはいやしとなります。ですから、神の怒りは、私たちに対しては励ましです。

アダムとエバが罪を犯したときも、神の怒りは、罪を犯した二人に向かってではなく、蛇に向かいました。アダムとエバに対しては、彼らの恐れを取り除くために衣を

着せました。そしてエデンの園から追放しましたが、これは今後信仰でしか神と関われなくなるということです。私たちの苦しみは、神を信じられないという不信仰から始まりましたから、いやすためには信仰を育てるしかないからです。イエス・キリストも「神の義とはあなたがたが私を見なくなることだ」と言われました。それは、神との関わりは、信仰によるものだけということです。

さて、私たちの祈りに対する神の答えは怒りです。それは、この世を支配する悪魔に向かいます。神は、私たちの罪に対して怒りを覚え、私たちを過去に閉じ込めた悪魔をさばくと言われました。その具体的な表れが、私たちから罪を取り除くため十字架に架かり、私たちをいやすということだったのです。これが神の怒りです。

人は、苦しみから救い出してほしいと神に祈ります。私たちの苦しみは、自分の中に生じた不安です。困難という出来事自体が苦しみなのではなく、それによって自分の中にあった不安に気づき、苦しんでいるのです。その不安は、神が見えない不安です。神が見えないため、問題にぶつかると、「大丈夫だろうか」と不安になってしまうのです。神が見えないのは、私たちが死の状態にあるからです。死とは神との分離です。だから、すべての苦しみは死から生じているのです。見える出来事が問題なのではありません。心に平安がないことが問題なのです。ですから神の解決は、あなたに平安を与えることです。それが、罪を取り除くということになるのです。私たちの祈りは神に届き、神はそれに対して怒りを発しました。私たちを苦しめている罪に神の怒りが集中する様子が、「雷鳴と声といわずまと地震」なのです。

■神の怒りによる苦難

「すると、七つのラッパを持っていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。第二の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人々が死んだ。第四の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、太

陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。また私は見た。一羽の鷲が中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわざが来る。わざわざが、わざわざが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」（黙示録 8:6-13）

私たちの祈りに答えて、神の怒りが地に投げ込まれた結果、天変地異や公害、事故などによる苦難が起こります。「苦よもぎ」はロシア語で「チェルノブイリ」であり、チェルノブイリで原発事故が起きたときには、多くの人々が聖書の預言を思い起こしました。さらに1羽の鷲が「わざわざが来る。」と叫んでいます。これはすべての人に死が訪れることを表しています。

神の怒りは、なぜこのような苦難をもたらすのでしょうか。それは神の光が輝くと、闇が明らかになるからです。それが、神への祈りの答えなのです。

なぜ私たちは死を恐れるのか、いのちを知っているからです。なぜ天変地異を恐れるのか、平和を知っているからです。私たちが苦難を恐れるのは、苦難のない世界を知っているからです。なぜ、それらを知っているのか、それは、私たちの中に光があるからです。私たちがさまざまな困難に苦しむのは、光を持ったからです。神の愛を受けているので、闇がはっきりとわかるようになったのです。そのことがここに記されているのです。

「闇」とは「罪」です。人は「罪」というと、不道德な行いを想像します。しかし、それだけではありません。聖書が教える罪は、状態のことです。神に頼らず自分の力で自分の価値を見出そうとすること、傲慢、高ぶりなどの状態が罪なのです。

人は例外なく、自分の力で自分の価値を見つけ出そうとして生きています。だから、私たちは互いのうわべを比較し、優劣をつけます。それが、自分の力で自分の価値を手に入れようとする行動です。人から優れていると認めってもらうために、必死になって生きているのが私たちの現状で、これを聖書は罪というのです。なぜならそこには神がないからです。

そこで神は私たちを光で照らし、闇を教えます。つまり、あなたの弱さ、あなたの限界を示すのです。死を前にして私たちは、自分の弱さを認めざるを得ません。そうになると人は「神様、助けてください」と祈らざるを得ません。つまり、罪を言い表すのです。

罪を言い表すとは、自分の弱さを認め、神に頼ることです。こうして神に助けを乞うなら、神はあなたをしっかりと助けます。そして神がいなかった人生に神が介入してくるのです。

これが私たちに平安を与えます。私たちは祈れば祈るだけ平安が来るということを体験しているはずですが、祈って聖書を開けば、様々な御言葉が、今自分に語られている言葉として信じることができ、勇気を持つことができるのです。

神の怒りとは、神が私たちの中に光を照らして私たちの中にある闇、弱さというものを明らかにすることであり、そのために天変地異などがあります。ただし、神が天変地異を起こすわけではありません。また、あなたを肉体の死に導くこともしません。この世界の困難はすべて、有限性という死に原因がありあす。死は悪魔のしわざによって私たちに入り込んだものです。神は死に対して怒りを覚え、死をさばきます。その過去から未来に心向けさせようとするために神が使う武器が赦しの恵みです。

それを受け取るためには、私たち自身が限界を認めなければなりません。人は苦しみを通して限界に気づきます。苦難を知り、自分の限界に気づき、神に祈るようになります。それが、罪を認めて言い表し、神に助けを乞うということです。

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（Iヨハネ1:8-10）

誰もが罪を犯しています。それは、神の力によって生きるのではなく、自分の力、行いによって自分の価値を見出そうとして生きようとしているということです。これが私たちの真の罪です。もし、「そんなことはない」というのであれば、その人は自分を欺いています。ですから、本当に神の怒りが下り、真理を持つようになると、私たちは罪を認めるようになります。それは、見える物を頼り、自分の力に生きていて神を認めてこなかった、その結果、悪いことをしてしまったと認めることです。罪を言い表すとは難しいことではなく、「神様助けてください」と求めることです。というのは、神に頼らないことが罪だからです。神に助けを乞うとき、あなたは罪を言い表しています。そうすると、神は平安をもって答えてくださるのです。

聖書は、今神があなたに語る言葉です。神は言葉をもって励まし、あなたがそれを信じる時、その言葉は力となってあなたを変えていきます。神の怒りは罪を明らかにします。患難を明らかにし、私たちの弱さと限界を明らかにします。ですから、様々な患難に出会うということは幸いなことです。神は祈りに答えて地に怒りを投げつけました。それは私たちの罪を明らかにし、神の前にへりくだらせ、神に寄り頼む者にするということなのです。

こういう視点で黙示録を読むと、神の深い励ましに気づきます。黙示録がこうした苦難の様子を示すのは、神に寄り頼めば希望があることを教えるためです。暗闇を明らかにするのは、希望があるからです。私たちが死を恐れるのは、いのちを知っているからであると同時に、希望があることを示すためでもあります。

「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生きたままでも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」（ローマ 4:18-21）

神が光を通して苦難を明らかにするのは、その中にあっても望みがあるからです。アブラハムがおよそ 100 歳になっても、自分の子を望んだのは、神の約束を信じたからです。この世界では望み得ないものでも、神の約束ならば望みがあります。だから、患難の中にあっても望みはなくなりません。世界の最大の患難は肉体の死です。死だけは私たち人間にはどうすることもできません。しかし、神の約束を信じるならここにも望みがあります。

黙示録がこんな苦難を記しているのは、たとえこんな苦難があっても、あなたには希望があることを教えたいからです。

「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。」（ローマ 4:17）

私たちは確かに永遠のいのちを与えられましたが、霊のからだを目で見ることにはできません。しかし、神はそれを在るものと扱ってくださるのです。私たちは、どんなに頑張っても、自分の価値を得ようとしてしまう罪人です。そんな罪人を神は義人と呼ばれます。どこも立派ではないのに、神は私たちを義としてくださいました。死ぬ運命なのに、生きている、よみがえっているとされます。これらを信じることを信仰と言います。

この世界は朽ちる世界であり、苦難に満ちています。しかし、信仰によってこの世界で生きるなら、それでも希望があります。この希望をもって神は私たちに挑戦してきます。それは、未来をもって過去の世界にぶつかってくるということです。そのぶ

つかるところが今です。

「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ 5:1-5）

神が私たちが義人と呼んでいるということは、神との間にもう平和を持っているということです。ですから、どんな苦難の中にあっても、私たちには希望があります。「神の愛が私たちの心に注がれている」とは、あなたの心を神の愛がとらえるということであり、これが祈りの答えであり、神の怒りです。神の愛があなたをとらえた結果、闇がわかるようになり、神の言葉にすがろうとして祈るようになります。そして、どんな患難にあっても希望を持つことができるようになるのです。

希望があるから、人生において色々な苦難を味わうのです。それは神の光を持ったからです。祈り、平安を手にし、さらに現実の問題も様々な形で解決されていきます。